

1期生 並里 成

Narito Namizato



アメリカ留学を終えて

並里レポート vol.3

「勝負は始まっている」

宮地陽子●取材・文・撮影
text & photo by Yoko Miyaji

スラムダンク奨学生1期生の並里成が先ほど奨学生としての期間を終えて日本に帰国、JBLリンク栃木ブレックス入りを発表した。アメリカで進学をするのではなく日本のJBLチーム入りという決断に驚いた人もいたかもしれない。

しかし、並里も決して簡単な気持ちでその決断を下したわけではなかった。

この1年間、アメリカで苦労、経験を重ねてきた並里は、すでに留学当初の18歳の少年ではない。そして、その経験から得たことは、この先どんな道を選んだとしても無駄になることはないはずだ



今年(2009年)4月下旬、並里成は1ヶ月ぶりにサウスセントを訪れていた。

3月にバスケットボールのシーズンを終えた後は英語の集中講座のためにロードアイランドの大学付属英語学校で勉強していたため、久しぶりに踏むサウスセントの地だった。「久しぶりで楽しいです。たまに帰ってくるのもいいですね」と並里は言った。

「帰ってくる」という言葉が自然に出てくる。自分でも気づかないうちに、サウスセントがアメリカでの故郷のようになっていたのだ。

「1年前にここに来たときのことを思い出しますね。何か、早いような、遅いような…」と、この1年間の生活に思いを馳せた。

1年前の4月、並里は3歳の頃から愛用している『忍者戦隊カクレンジャー』のタオルケットとともにサウスセントにやってきた。O型で親分肌の並里とカクレンジャーのタオルケットという mismatch がおかしかったが、悪びれることもなく笑顔でタオルケットを広げて見せてくれた。「寝るとき、枕と自分の顔の横の間に挟んで寝てるんです。手で触ったときの感触が違うんですよ」と嬉しそうに話していた。

バスケットボールのために、中学を卒業すると同時に故郷沖縄を出て福岡に渡り、高校卒業後はアメリカまで出てきた彼にとって、言ってみればこのタオルケットが家族代わりだったのかもしれない。しっかりしているように見えても、まだ高校を出たばかりのティーンエイジャーだったのだ。見知らぬ土地。英語だけの環境。強がっているようでも、心の底で不安に思っていないわけがない。



実際、サウスセントでの生活を始めると、日本との違いに戸惑うことも多かった。

単に言葉や食事の違いだけではない。根本的な感覚や考え方の違いには、当初、戸惑うことばかりだった。戸惑うだけでなく、時には不条理に感じることもあった。「たとえば、日本ではこういう理由は通用するけれど、アメリカでは全然通用しないとか。人間関係のあり方とか。たとえ日本では正しいことだったとしても、アメリカではそれは関係ない。やっぱり、ここはアメリカなんだなって思いました」

具体的に、どんなことがあったのかと聞くと、「具体的には全然覚えていないんです。すぐ忘れるたちなんです」と言う。一年余りたち、文化の違いや考え方の違いによるギャップにも慣れ、当時どんなことを苦しいと思ったのかは忘れても、そのときの感情だけは記憶の中に強く刻まれていた。

そういえば、福岡第一高校にいた時に、外国から来た留学生が母国とは違う日本のやり方に慣れるのに苦労していたことを思い出した。自分がその立場になってみて、あらためて彼らの当時の気持ちも理解できた。と同時に、その土地のやり方を受け入れることも必要なのだということも理解できた。「高校のとき、壁にぶつかったときには逃げないで、一回休憩して、自分でちゃんと考えてから行動とるっていうのも教わったんです。そのことを思い出していました」





最大の試練に直面したのは去年12月、サウスセントの教師、そして奨学金のスタッフから「今の君の英語力から考えて、来年秋にNCAAに入ることは難しい」と言い渡されたときだった。

この頃、練習や試合にはよくNCAAのコーチたちが見学に来ていた。チームメイトの中には、すでにNCAAのチームから声をかけられている選手もいた。そして、訪れたコーチの中には並里の才能に目をつけてくれた人もいた。そんな環境の中で並里自身、「秋には大学（NCAA）に入れる」と思い込んでいたところがあった。

しかし、たとえバスケットボールの面でNCAAのチームからスカウトされるぐらいの能力があっても、それだけでNCAAでバスケットボールができるわけではない。

NCAAの規定で、勉強面でも一定基準以上の成績を取らないと選手としてチームの活動に参加するわけにはいかないのだ。すでに日本で高校を卒業している並里の場合、中学3年から高校3年までの成績と、アメリカの大学進学適正共通テスト（SAT）の成績の組み合わせによって判断されるのだが、この12月の時点で、並里の英語力はまだSATの問題を理解するところまでも到達していなかったのだ。

成績が足りないわかっている選手をあえてリクルートし、成績が上がるのを待ってくれるような大学はほとんどない。特に並里のようなサイズの小さいガード選手は、アメリカ中に山ほどいるのだ。

サウスセントのヘッドコーチ、ケルビン・ジェファーソンも言う。

「ナリがどこかの大学でプレーできることは確実だ。ただ、今はどのコーチも彼が（成績面で）この先どうなるかを待っているような状態だ」

バスケットボールでは、勉強よりはスムーズにアメリカに入ることができた。チームメイトたちともすぐに仲良くなり、片言の英語ながら、持ち前の明るさで、すぐにチームに溶け込んだ。本場、アメリカのバスケットボールも日本にいるときから思い描いていた通りで、楽しくてしかたなかった。沖縄で生まれ育ち、子供の頃からアメリカのバスケットボールを身近に感じる環境で育った彼が憧れていた世界が、そこにはあった。

「自分はアメリカのバスケット、本当に好きなんです。バスケットしているだけで楽しかったです」

バスケットボールの楽しさがあったからこそ、勉強面や常識の違いなどの苦勞も乗り越えられたのだという。

とはいえ、コート上でまったく苦勞がなかったかという、そういうわけでもない。憧れていたアメリカのバスケットボールだったが、いざその中に入ってみると、日本のバスケットボールで身につけていた習慣が邪魔をすることもあった。自分の持ち味を出し切れないもどかしさも感じた。

チームには全米から才能ある選手が集まってきており、並里を含めて3人のポイントガードがいる中で、試合によっては出番がまったくないこともあった。日本では常に先発で、チームの中心選手として活躍してきた彼にとって、ベンチに座っているだけで試合が終わるとするのは初めての経験だった。

一番悔しかったのは、ただ単に試合に出られなかったことではなかった。

シーズン序盤、まだチームが出来上がっていない頃、流れが悪く、それなのにチームメイトたちはほとんど声も出そうともせず、チームがバラバラだった時期があった。負け試合が続ぎ、試合に出ているチームメイトの気持ちが切れてしまっているのを見たとき、自分が出たほうがチームに貢献できるのにと、ベンチで悔しい思いを噛み締めていた。

「『こいつらは一生懸命やっていないのに、何でコーチは俺を出してくれないのか』って思ってたんです。あいつらがぐたぐたの試合をするよりは、英語を喋れなくても自分が出て頑張ったほうが絶対いいゲームができるって思っていた」と当時を振り返る。

シーズンが半ばを過ぎた頃から、次第にチームとしてまとまってきて、試合に出ている選手たちもあまり気を抜いた試合をしなくなると、たとえ自分が出られない試合でも、そんな不満もなくなっていったという。「みんな試合でも最初から頑張ってくれていて、自分の中で筋が通っているように思った。だから自分もチームのためにいろいろやろうと思って、ベンチで声を出したり、みんながベンチに帰ってきたら水を持ってきたりとかしていました」



実際、シーズン後半の並里はベンチにいてもよく声を出し、仲間のいいプレーひとつにも、立ち上がって声援を送っていた。

並里自身のプレータイムが少しずつ増えていったのも、その頃からだった。

日本で自分がエースだったときは違い、控えから出るという役割にも少しずつ慣れていった。

「アメリカでは、いろんな選手がいて、いろんな選手が使われるから、自分のプレータイムも短くなる。だから1試合40分間体力を持たせるプレーをするのではなく、短時間でハードに、アグレッシブにプレーするようにしてます」と並里は言っていた。

才能があるチームメイトが多い中で、どうすれば自分がチームに貢献できるかも常に考えていたという。

「日本のときは見せるプレーとか、表でプレーしていたんですけど、やっぱりアメリカに来たら、表でプレーする選手が多いから、自分が逆に、地味にリバウンドに行ったり、ディフェンス頑張ったりとか、そういう、見えないところをやったらいんじゃないかなって思うんです」

実際、並里のディフェンスはチームの大事な戦力となっていた。相手選手からチャージングを取ったり、スティールでボールを奪うことも多く、それがチームの流れを作り出すことも頻繁にあった。ボールハンドリング力、パス裁きとともに、コーチから認められていた点だ。

3月、プレイオフに入ると、チャンスが巡ってきた。先発ポイントガードが足を故障、試合に出られなくなったため、二番手のポイントガードとして、毎試合確実にプレータイムを得られるようになったのだ。

中でも持ち味を発揮したのが、NEPSAC（サウスセントが所属していたNew England Preparatory School Athletic Council）の上位8チームが出場したプレイオフ準決勝のウィンチェンドン戦。並里は持ち前のアグレッシブなプレーで、相手のプレスディフェンスを崩し、ジャンプシュートも沈め、守備では相手にプレッシャーをかける好ディフェンスをするなど、チームの勝利に貢献した。その後、決勝戦で敗れ、全米選抜大会でも1回戦で敗れてしまったが、それでも「悔いはない」と言えるだけのシーズンの締めくくりとなった。

「ナリは、この1年でチームをどう率いたらいいかということを学んだと思う」とジェファーソン・コーチは言った。

「彼のボールハンドリング力はすばらしく、彼がボールを持つと、他の多くの人ができないようなことをいろいろできる。

ただ、彼はどうやってリーダーになり、チームを率いるポイントガードになるかを学ばなくてはいけなかった。

シーズンの終盤、特にトーナメント（プレイオフ）に入ってから立派にその役割を果たしてくれた」



奨学期間を終えて6月に日本に帰国した並里は、帰国後にあらためて進路を考えた。

12月に成績が足りないと言われ渡された後、それまで以上に多くの時間を勉強に割いてきた。

3月にバスケットボールのシーズンが終わった後にはロードアイランドにある英語学校に移り、勉強を続けていた、しかしそれでも、まだNCAAに進学するには成績が足りなかった。

アメリカで進学するとすれば、現実的な道はまずは短大に進学し、2年後までにNCAAに編入できるような英語力を身につけ、試験での成績を残すことだった。それとはまた別に、日本でバスケットボールを続けながら、将来的に再びアメリカでのバスケットボールに挑戦するという道もあった。

帰国後、JBLのリンク栃木ブレックスから契約オファーの話があつて、現実的な選択肢となった。

アメリカの短大からNCAA強豪校への道。ブレックスから将来NBAへの挑戦の道。どちらを選んでも決して簡単な道のりでないことは確かだ。

7月に入り、並里はブレックス入りを決意した。決断に至った経緯を並里はこう語る。

「ブレックススクールへ行かせて頂き、トップレベルの大学でのプレーを目指していましたが、成績の面で難しい状況でした。

そんな中で、アメリカの大学へ行くよりは、日本のプロチームでプレーしながら英語も勉強して目標としているNBAに挑戦するのもいいのではないかなと思うようになりました。

オファーを頂いたブレックスは、日本のチームの中で自分が目指しているアメリカのスタイルに近いこと、ヘッドコーチもアメリカ人の方と聞いていたので決断しました」

彼が昔から、最終的な目標としてきたのはNBAだった。それは、NCAA進学を諦めた今でも変わらない。

8月、ブレックスの一員として新たなスタートを切った並里は、力強く宣言した。

「いままで通り全力でNBAを目指します！」

奨学生としてのこの1年は長いようであつという間に過ぎていった。その一方で、あつという間のように、振り返ると多くの経験が詰まってもいた。スラムダンク奨学生としての期間を終えた並里は、次のように1年間を振り返った。

「今からもっと苦しいことがあると思うんですけど、この1年は人生最初の苦しい時期でしたね。でも、それを乗り越えたことで、最初の一步が踏み出せた感じです。

この先は、まずは英語を完璧にして、あとは人間として成長したい。そうすれば、絶対バスケットでも結果がついてくると思う。僕ももう20歳になる（※）ので、今年から勝負が始まっていると思うんです」



※並里は今年の8月7日に誕生日を迎え20歳となった